

# 発刊にあたつて

愛知県教員組合執行委員長

青木

一

学校には元気に遊ぶ子どもたちの姿があり、さわやかな声がひびいています。町には、楽しく語り合う若者たちがあふれ、家には、なごやかな夕食があります。しかし、戦争となれば、学校は兵舎や農場に変わり、町は焼け野原に一変し、がれきや焼死体が山と積れます。無差別な殺傷も大量虐殺も平気で行われ、人の命の尊厳など遠い彼方に追いやられます。

戦争は起ころのではなく、人間が起こしてきたのです。このあやまちを二度と繰り返してはなりません。戦後三十八年経過した現在、悲惨で残虐非道なわたくしたちの戦争体験も風化しつつあり、戦争体験をもたない人々がふえていきます。青少年の間には、戦争は勇ましく、カッコイイという風潮がはびこっています。

また、世界各地では局地的な戦争が行われ、多数の人命が失われています。一歩まちがえれば、核により人類が破滅する恐怖さえ生じています。

わたくしたちは、「教え子を再び戦場へ送るな」の不滅のスローガンを高く掲げ、次の世代にならう子どもたちが、平和の価値を知り、平和を築くことができるよう平和憲法と教育基本法に基づく教育を推進しなければなりません。

そのような考えにたって、昨年度、平和教育推進委員会が発足しました。「わたくしたちにできることは何か。」「子どもに何をしてやれるのか。」と論議する中で、『子どもたちが読める戦争体験記をつくろう』として、それを子どもたちが読み、また教師が読み聞かせることによつて、『戦争の非人間性・残虐性を知らせよう』『平和の尊さと生命の尊厳を理解させよう』『平和を守り、築く力を育てよう』という考えが生まれてきました。

ここに寄せられた三十九の方々の体験は、平和を願い・愛し・求める声や、戦争への心から怒りが満ちています。この貴重な記録が、平和教育の一助になり、次の世代の子どもたちに語り継がれることを願い、この戦争体験の記録「焼け跡に立つ虹」を発刊する次第です。

一九八四年三月